



建白

3019



114
A4157



皇恩を奉辨萬一之節
貴賤に不拘
大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

皇恩を奉辨萬一之節

國家之沛為之者可相成心掛致忘却同教育初推一時より又師

教誡を文雅在公得共生得不才思蒙之身其而詮成之却而

放蕩不頼之成長仕徒之教檢年々先法強過作内時態漸々變遷

仕今日

皇運再び相用事

聖世之遭遇仕作儀志實以冥加至極大幸之至奉存作猶其上博く

建言上策を被為 容

國家有益之策去彼令忌諱に奉觸作事より共世色憚有辨

獻白可仕有兼而

御布告之類不堪銘感儀に侍座作依く列公巨卿を始天下有道

之士を登庸せしむ

皇國永久之御深策を公議衆評して

皇室を輔佐せしむ作上を日を述る

國律齊整を仰さ可申儀に侍座作得る氣華に方於私式

何と可奉申上候ハ至侍座作得共邊鄙育ちく遺瀨なく

天威を不奉顧胸中之思意一白仕作然者方今

王政 御一新之折柄舊弊之

御國典ハ大小となく述く 御慶く萬事 御復古被為在侍共

今まは至急至要之大事件未く 御復古不相成之儀侍座に

け一言ハ誠以不敬至極奉冒萬死作申上事に侍座作得共新

日出度

御代に奉逢歡喜之餘り狂亂仕作か

御寛憐之上より宜く

御裁量被為當法下並作模倣の奉葉量作隨の古代鎖國

御時世と遠ひ今や外國 御交際之

御國神の殊更彼洋夷富國強兵火技器械之巧術を逞

四海并吞之狡畧を抱き或ハ利解を以民心を誘ひ或ハ理辯を以

播紳を服し百計千方にて興廢を窺ひ居以折柄の御座作得る

邦内之兆民に存く

皇恩を辨へさせ忠勇節義之心を一致して方向を正し

皇威を萬國に赫輝し誇るる大基礎を 御立可被為遊倣之

急務成事ハ申上作迄後皇御座作必定樞要之御方

御策畧可有御座倣との下段ハ可奉諒察倣之皇御座以御共

御布告之御上之旨を奉定観作之唯外面ハ制度文物を而已

御愛草有之兎角眼前一時之美を輝し作迄との内ハ民心を

固め外ハ洋夷を伏せ御さ深遠之御思慮不被為届以外に

未思愚見仕申作

皇大御邦を古より

神州と稱し民俗正直にして義勇を重んず君子國之名譽海外より

高く 國家量饒蛮夷も武威に畏れ作程之

洋國振り清國作事今ハ彼洋夷共より蔑視せられ人民

義氣少く只財利を競ひ上下一致相合せ日夜奉賜

震襟作國俗と相成居を外見より亦見ざるやハ一列

清法令に随従し

王化洽さかぬと強強ハ賣婦之浮客に順従して内公

貞操之義氣たのさかぬ第一緩急之清時節にも之玉り

作時を始終我身し安全を謀り或ハ強弱を觀望し或ハ

産業之盛衰を慮り或ハ洋夷之心を察せ或ハ長工失策を

笑ひ表ハ言を巧みに理を述れと内公大和魂を守りて

神州之為に義を重んず者ハ千百人中に一ハ或強得存存ハ

但小民のみならず士を以て之もけ習風押移居作ハ難計

存存作然教時ハ

皇統連綿之

高御座を誰を頼み守り終らんや是其の過慮一獻言法座
作得共古人之語も煙を見火成事一を知り南を見火成
事一を知れハ終途一といハ然如く方七一時情一ハ千歳一
後如何成行可ヤ我叔も其國一冠絶一也

神國之 神國神ハ今何處一也一相見ハ作我憂國之愚民長大
息可仕仕合一清在作元來

皇國ハ一方に孤立して世界之事情一不達只偷安を以志と一
在萬表微を致一漢上ハ一如く自一尊大にして大羊と
蔑視一た我我狀一為一歩一却の驅使せらば是以渡轍も之を
愈々近代之形勢一及び作儀一付け度深さ

神極意を以實際之道一を二念被為一用彼一長を取我一
短を補ひ萬國普通之公法を以我世一

神基礎被為立協同和合一して宇内之形勢を辨一

皇國一大草一

皇威を海外に赫輝せしめよ其時一在野一

御英断を以更始 御一新

御同業被為之作依之實以千古不拔

御卓畧時勢相當之語依言詔之及至之至伊度作然於

大思道日

清政布を奉見作之唯其名有て其實更之至伊度以其

故如何にと奉申と作之今試

皇國と和親く各國と比較仕ゆ之大小を論じゆ之付之彼八十

餘國我ハ一國益械火技ハ彼ハ本我ハ末兵隊航海

付之去彼ハ老練我ハ新習貪富を論じゆ之彼之字内

貿易して其利を要め我ハ再興仕組中其餘百二之器具日用

諸製之玉匠彼を以標準とせむ我事な之然於時我

心ハ常に畏縮ハ彼ハ蹂躪鹿之心を振み何事一日

皇威を海外に赫輝ハ彼ハ富を基礎ハ成功を仰ぐ可ヤ

是漢古を摸せしむ

朝典を改定ハ彼ハ富を名ハ相立ハ得共萬民之方向を知り

富を以實ハ之不相見作却る洋夷ハ奸謀に漏り

皇國之邦民として彼が虜奴とならむ之を救ふ事を日と教へて

可待に似て所謂前門之虎を退て後門之狼を拓く機念の白
去進洋技洋學を併採用は為遊の依を不道と奪りて
誤に毛頭を汚産作大技急械之巧窮埋測量に精を去
彼が長を我より奪はんと是を特んで字用に縱横を於以て具
なきは我亦其具を習用して抗對不仕はるる侮辱を蒙り
可なり月洋學は得習し依も時勢相尚專要し汚依は汚産の
依は併くを以て國普通之公法とせ依は只彼の私論と畢竟
正見を以て之を思考仕りて本末内外先後等々輕重を
能酌量し之を安置不仕はるる大に 國家を謀りて定理汚産
作を今日に於て中情に在る國民上下一致して

皇恩を感戴仕る忠真義之心を為抱進作依る本也内なり
洋技修學之依は是に比しては末其外在可なり其故は如何程
洋技洋學之熟達仕る共心之義氣を以ては小国を昇花
よりも清同交却の國害に助力と相成可なり同民心を安む
を以て

御處置

汚油断絶遊作り終る外物を為内心

主を以て奪民心離散仕洋夷を愛慕し

皇國を疎みしつとをく國家衰乱に可及ハ必然ノ勢ニ涉座以

私依民間ニ生長茲在親ク洞見仕以情節ニ向放而空論ニ

至涉座作をとは孔子も忠信を主と以てり是則

皇國之人民におわていそま

神州之

皇恩を辨へ

御國大切ニ燃立作真情を以て本心ニ主と

為立作依り涉座作百官士大夫ハ不及半ニ匠吏下郎ニ至迄

皇國ニ生息出向け心を不持者ハそ人哉至涉座以得共培養之

道其直を不付以時去漸ク変性仕中以従前相門武將ノ

政權を握り

皇家之衰微ニ被及作後其弊之由ク来新也ハ中世以来去

都の唐制を換へて

朝典を被為立作より人民義氣を失ひ次第ニ

皇室衰微を生し作と識者ノ論有るハ以て依其頃幸ニ

漢土人ノ

皇國を觀覽する者なきに故唯桐將を凌辱を請はしむ

偶

聖明之主被為

出作時去今日如く平然として政權渡一仕作得共

今ハ洋夷刮目して隙を窺ひ居作得去萬く一民心

離散を来し後等奸畧を遂げ玉ふ去再び控御恢復

術計ハ至汚辱作古人に詔も夫人必自侮然後人侮之

家必自毀然後人毀之國必自伐然後人伐之と相見らる

如何程外人隙を窺ひ奸計を思ふと隨自侮自毀び

上下和合確守仕作時去何く危き事一皆至汚辱作得共

我邦近日々情態を奉見作去し深情ハ下不通下ハ

上し令を侮り小吏ハ互に名利を争ひ上を欺き下を凌る

者も不少或ハ自國之譽を辱して外人に論ひ各我一方

僥倖を樂みとして上下一致しを以

皇國を守護仕ハ形容聊も不相見殆ど自伐自毀し有様

彷彿し日次中至汚辱作隨うけ表違を挽回

國光を海外に輝く外敵も畏服して隙を伺ふ事を得ざらん
むねの民間婦女子に正節義之道理を辨へ上下金鐵
心を合一して

皇上に奉公可仕し心根を抱くむね事今日急専勢あり
清俗作政令法度も固より 國家之大道に作得共只是を

而已如何程 御一新初成は共唯外體を成想を致し
是れ近き人し心根を變化して實之に固めは倣は教化を
有るべき事ありあれは難極作孔子も衛國之民に多きを

見て居るは後には教を加ふる事し孟子も善政不如善教
之得民也と申しは志述儒道を主として國人を教化せし
事ハ矣措くありて作 舍人親王に神道に神道を主と

し儒佛を以羽翬ともをふるとは最尊き 神道意あり
其頃儒佛は道盛ははけ 親王も至りに佛信者あり
す作得共流石に古代之遺法を被為守 神道を以

主根ともをふるとは萬古之 御金言に奉仰作然れ
後世は何事し事にも儒道を以主事とせんと羽翬共あり

本邦に 神道之法 押制 枯槁 仕甲 以 扱其 神道を奉
申作 去 強ち 祭禮 神事 扱等 一 式 而 之 之 法 度
皇國を保護 一 終 不 爲 に

天津神之 立定 魚 終 不 道 之 法 度 惟 得 志 片 時 前

佛等 閑 之 難 彼 爲 成 事 一 佛 教 之 法 度 惟 是 志

天皇陛下之

御職掌 一 一 一 神道を以 萬民を教育 終 不 事 一

天之御中主神を奉 始

八百萬御神別 之

天照皇大御神 之 祭 捧 終 不 爲 一 大 本 成 之 故 之

天皇之 御政事 之

皇國 之 終 不 一 訓 一 以 忠 心

皇國 而 之 終 不 一 天 地 間 所 有 程 一 國 土 之 皆

天之御中主神之 皇座之 神靈 之 依 而 成 坐 一 人 一 一 神道 之

遂 一 一 爲 一 生 坐 一 一 並 終 一 一 作 故 國 一 一 之 衣 月 相 異 一 一 以 忠 心

皇國之 神道之 理 之 濟 一 一 事 一 不 相 叶 作 依 一 一 天 下 古 今 一 一

興廢を懸觀仕作に道理に本付尊信を於に興り尊信
せざるは七ひひ足

天津神之 高天原に在りて常世に主宰し給ふ

神憲法に 神権より出給ふる永遠不易の理は是

則真に萬國普通之公法なる所産作然於に道理に真に

古傳説の亦く哉唯

皇大御邦に而は令く傳存仕作に付よ世を 神代に相唱國を

神別を名付

漢主人の自の尊大にして中國と
自負の心初見の如くは法を以

天孫連傳にて

天津日嗣を被為継作間

人皇之 御代に相成ひるも猶更け道を被為守

皇極天皇之 神紀にハ

天皇順考古道而為政也と又

孝徳天皇之 神紀にハ惟神我子應治故寄と相見に其他古事紀

書紀等其例不少作を述代るも 神道と佛道と並稱し

世外之道にゆく成り但兩部神道之安流ハ先達也

佛廢棄必 作皆作得共未之國國之人民以道一尊大成
事と多(き)せて

佛靈頼之依之貴徳之勸化

皇御邦を保護し給ふ事 佛盛興相立不中作前文今

その至急必要之大事件 御復古不相成し故佛座作と言上

仕作去別以儀之佛座作を

皇國 神道古傳説之えハ畏く茂掛巻茂

神嘗金命 神魯美命 大御口以の傳(坐) 天津詔大詔命に

至真之正云茂雅得妙成道理之佛座の事漢學者生優心

流の事見作時ハ如何も漢同及説証奇怪之説ハ如く海共

實之萬世不朽確乎不可拔之常理相備り作近代窮理測量

等々學大に相用實算之真を極於事一第事精密相成

作之隨ハ今迄至理と思ひ定め漢土之説採其謬り成事

冰然として顯る

皇國神道之古傳乃ハ保正真成之事今之至の益著明佛座の

私依 五ヶ年一問瀆藝仕唯是而之皇族之昔め身命と妻社

美園之古傳と照合探窮仕我 邦 神道之真實正教

成事を發明仕作是た倭

神國之生と出作

天津神く測りたさ 御恵みと

天照皇大御神之

御靈頼に依るく依る貴以不知所謝作邪於至尊至對要寶

心交也朕以基傳教空海等之貴僧は編造心傳を暗

作依る言詭道断歎々後次第に汗度得共本然至明

神道に付

天津神 國津神之

御加護に依る令く湮滅して地は強し事と

不得今般

玉政 御一新之 御代と相成作と共に古心傳之真光を

有見出作依る貴に不可思議之奇遇と自今

皇威之四表に光被可仕希兆と歡喜踊躍仕はる方今都下

おいて哉

皇國學修行之儀百々 御世話被為在作得共夫張漢學者

流く真氣を免うべき教化之實用に相成不申作依く長文
煩密汚塵作得共神儒兩道之得失を大畧可奉申上作
作

天津神々天地を周りを養生を化成し給ふにおおて名々靈力
唯神道之深程を銘刻して賦興し給ふ故に凡万国誰人
不拘私欲我意を更ち奉然之良能に返歸の省察仕作時

天津神々天上に在りて萬事を主宰し給ひ美人の實徳を重ん
むべき事奉分也とて道理はるべき得とて作依く漢土

おいてハ彼堯舜より以下拾教人其中にも孔孟は如きは千古
不凡人物故に流くけ理に貫通し自りて勉強困苦と切徳
を積其所説も實蹟を経るる教訓なきが如何とも深切とて
自然に神道に理に相叶ひ飛躍に備ふる事も多し
汚塵の同天下の事圓け教を排謗仕ゆ者ハ之を去之来自力
く發明なきハ人智に乃其限り多幽微之 神業に玉のハ
神之真傳を不棄してハ孔子に聖と隆知の事能く依り
言論教論ハ深切に汚塵作得共道に心鶴を汚塵に故荒人

して弘通せしめ其身を達固より實踐の功業を唯字理を
取らば其説を辨駁せしめ以て勸懲を著し其
充棟及びいひて其真理一定不仕百枝を流し其獨匠を
成らば其弊を民間にも押移り終に讀書を以て其者も勸め
きは博識を誇り議論を好み人と侮傷し偏に弊を遁る
者ハ文章一字の長を以て其依り學問教化ハ唯文章
一藝と成り實徳を進む者ハ甚稀に有るハ其學問
實用ハ自己の身を修め智者ハ天下を平治せしめ其

頓路ハ先己の明德を明くして善く人々及び愚夫
愚婦に教へ各其徳を得せしむ一道理の外なきハ然れど
其理儒門第一義に有るが如く儒者流之教化するハ徳を以て事
成らず不仕作を以てば孔子も終己以安百姓竟舜其猶
病諸と申は是畢竟人道に正鶴を以て教化し法則を成故に
清度作世人是等一理に固らば故に時世に形勢を託り仁義
道德ハ古代に事也とて始に不取らば有る甚以て其遠
く其の時勢に流るるを以て其道に不依りて依りて事

時勢に依り真道難く、或人も制勢者人也とせし
如く國家を駕御を以て、真道に依らず不依とあり
勢に強弱あり、神道ハ

天白王ハ是を以

皇國を治め給ひ億兆之人民ハ是を以奉仕可為仕為、何人
守り易くん為、先初め、心鶴を以て且

御靈頼と幸ち給ひ神人相合、保依に依り道徳に進む事容易
作故、一たび此、神教を信受は、おとてハ婦女も簡易

して真道を以、分限を守り貴意、歸り、忠勇を重んじ
國家に費用に成孔孟を舞、我難知真域、理を辯議
均し、我れも我れも、痴分相懸、隨り貴徳を勵み

皇室を保護は、及志を定め、以て玉り、作たま、神道
別、教導之書、在り、唯、神代、神事、以、同、自然と
正理相親り、作得共、只、大ら、か、ま、て、人、貴、跡、を、經、白、之、顯
し、以、教、諭、或、ハ、眼、前、之、理、を、以、小、賢、論、たる、言、兼、し
如く世人、為、身、進、く、在、り、度、ハ、故、也、
舍人親王之

神皇正統記に本村孔孟之道を以一方に在りて、
佛道に異を矯て右翼とせしむ。作時の本邦に

神道益光を生じしを以て、流布仕しを謂垂加

神道理學神道之類に之を御弊なき心真に理を

辨し、是を以て學問同軌之規則を敷き、教化を厚く仕

作時ハ農漁婦孺に至る迄、路に不迷、一列に真に大和

魂を興起し、上下協同して方向を失はば民業を安ん

皇上之、神為の財命を不惜忠勇節義を重んじ、吏人の

自りて苞苴私曲を戒め、百官を勤

王之規模相顯也

帝上ハハ取欽之巷議を被為免官庫ハ充滿して

帝國用も有餘より不虞に備はる。君民に恩愛ハ天然

父子之情に如く相成りし然るに平日ハ勿論如何成世愛非常

出来し若天下を留岳之安に並り何れ思はれ是ありんや

然於後ハ洋技洋學皆羽翼し、費用相立は

國內之有益と成外國交際皆實意と以、神懐け被為遊

作倭成出来作侍る益

皇御邦之

神國振之感服仕觀難く念頭亦自然に相消し以而己なるが
神之隨意に依る臣と稱して

朝貢を捧げて

皇國に奉仕可為仕 神所置出来可中時宜くも不難玉以交
玉のしそ

皇威を海外に赫輝せしめ以實境に神座惟たせし座國内

民心堅固ありざる中神文際ハ兎角我々柔弱に心後き

彼が極威の畏きを授温言慰籍を以表裏之兩扱をい

表ハ和親を講を於と強心ハ常に疑惑を醸し以故真の通信

不沈め動もなきハ混雜之痕接引出し斤時も安眠を得

固耗疲勞して自づから敬死するに及り可中既今般神條約

神改革の旨を耶蘇教弘方、彼をも必定願出可中

む是ハ 神拒絕相成可中神得在け節

勅許を以度作逆彼が名意ハ消散仕同安良奸界を以

誑誘し其後を思ふ可中の間足又兼る 神道と以
國民を望み其の時ハ其の動搖し觀念をけ度作想の教化
沸く民心を透入仕の時ハ容易に動し強きものなり天心
一向宗實承し鴻原賊杯いた道し教をうす成願す
一致し勢強盛に有之り以況や

天津神真正し教化を以懇切に教化は其の時ハ固有し義氣
引之孟軻ハ一丈し義氣も天地の間塞れり以盛國
之人民協同一致其正

神明之 御加護を奉蒙作に付百歩之外敵も窺ふ事
出来不り以彼西洋各國義性古ハ固弱く俗卑く作事
窮理之學等漸く相用けり以隨ひ紀元は六百年来以
人道し心鶴を發明し唯まの道を以規則と之る
教化を存し以故國勢次第に強大を催し其内にも
其の興廢存亡代りし度作得共教化は存し固ハ常に
堅固し清度は且教化局收納し財帛ハ自然と溢る政府
に歳入よりも歳信し清度作さるば高時要墨利加し合流國

英魯西亞等國を採る自余の國に別る教化の在り
佛朗西ハ近代迄く教化相養ハルに終に學漏生を亦負
申儀是乃みながる常ニ西洋各國共獨ニ濫觴ハル也
教事の起りやいむ彼ハ邪教の

神道之正教と同月同日ニ論ハルに伊藤ハ彼國の
正教之正尊信はは付教化ノ民心を導き申ハ同習伊藤ハ
加ク 神道ハ自國固有正傳ノ真教を以テバ一度是を
得たり及びてハ考人皆失ひたる本心を再ハ得る暗ハ明ニ

歸ノ多餘是之端を忌む真實ノ底より

皇室を愛する可仕ハ躬程至聖之 神教を亦ノ棄て他ハ

侮辱を請 國家之傾敗を振らんことを以テ貴以不堪切函

依ニ伊藤作

八幡大神之 佛託宣ニモ我國傳來之道を讀ハルに於てハ

神靈震怒して其祈を聽ハル時權を忌むハ一心奉侍セバ

我其濟之とし 伊藤論ニモ相見ハ作依之 一日我早ク

神道教化 佛復古彼為遊作模奉願ニ作既ニ去秋

以来北限邊密、隱謀之念相催居作依ハ最早

朝廷之 御聽ニ達シ居作外、お依儘ニ傳業法在ハ其ノ速ニ

御戒防之 弗、處置全シテ座ハ与テ力ク其ノ大車ニ至リ

可申ハ是者長崎近傍泰西民ノ固執仕ハ愚情ニ遠シ

不容易奸謀シテ座ハ得又今般西洋女師 弗、呼聲其

彼等ハ奸畧ノ手匠又一層ヲ得作近邊收仕居ハ其ノ有テ

弗取總ニ遊ハリテ思篤ト弗考慮シト未然ト防シテ

何ゾされハ我ハ難費ト出シテ彼ガ奸計ヲ助けハ相違リ

可申ハ是ノ、お依空稿ニ彼ノ兼リ其外疑ト洞悉仕ハ依シテ

依間如ク奉リ工作都ノ近目ノ情態ニシテ交易ノ有テ

教事ノ有テ其獨ノ學ヲ生シテ不中ナクモ惡懸念仕ハ依

シ座ハ世界ハ大教ノ内、理ニ密成奉リ耶穌教ノ在

出テ者ハ其シ座作外ニシテ耶穌教ヲ座ハ以テ道ハ其我

神道主ニシテ古傳ノ外ニシテ座作耶穌教ノ有テ

座ハ得テ如何程外交盛ニ相成ル

皇國萬々益益泰安更々無疑以依シテ一大寶貴也則

萬國を駕御し邪教を壓抑すは爲し之に神力が付
け至道を行ふに固守仕はし時ハ貴徳初化し依ハ勿論別
制度し又事も不勞して自然と國富民足兵強相成ハ
基ハ所産作猶政刑法令を立定諸省百官各協合して
委任し職を盡し以事勢を至てハ賤民に闕り初教べき
至所産の得た徳本也財末也といふ本文も所産の得た何事
教化を存くは其事ハ國家に必要ハ所産作隨百千餘年
に深習積重して浮薄伶俐相抱り以邦内の人成と
山村婦女近も貴徳に教化可仕といふ兼ハ近儒陳腐
之頑議する今世交の難施行といふ批判を更可ハ所産
是例に教化し其道を知りざる儒生に論する活評に至
所産作天地人類育らん限りハ真道に教化ハ日用に
糧食と同く一日も缺ぶらざる物と則靈方
兵糧に作得る規則を立定し道を行はし時ハ其の難事
至所産作其の從前ハ切毒に性不交調程意解し及を
其の故に痼疾を生し漸く之を氣衰耗仕はし今より

養生之規則と之調味を正くして食用仕は時ハ本漫

至疑諸請命仕は依し私依竊ニ實效經驗之上古真

神道ハ心鶴大意ニ修身進徳ハ又文教導ノ規則

等ハ流増取調直ハ得テ貴地ハ工用ニ思文ニハ取仍め

雜書盡テ又或許座ハ同今日近ハ其控直不奉捧作若

ハ思榮

市納受之上

市吟味ニ為

作付下作リ其節

詳細ニ述

奏聞猶不相當之也ハ可奉仰

天裁作回

官府之古史諸神社傳來ノ神祕等も不少可有

市座作ハ其精微蘊奧之條目ハ特ニ師範家凡人撰窮求

可被 作付依ハ市座ハ同會議討論之上亦確實之教規

可被為之作依專要ハ市依ハ市座作隨向私依官位俸禄と

妄ニ貪リハ私願ハ毛頭之市座作得共ハ要件

御用業被為遊作リ私依貴驗を試直ハ依ハ何率相適ハ

微職ニ為

石仕下度重テ奉願工作古人も請自隗

始とついた作得去

國家之 帝為ニ身命を抛ち奔走粉骨仕

神祐と

皇威と依り頼經營諸 官員之帝指揮を請實切之基礎

相之奉備

敷覽及奉存正作在 一時之成功を羨し可中候ハ不相叶以得共
遅く共十ヶ年内外ハ天晴萬國無双之

御國神美世不朽之大基礎相固り作候候ニ照して觀候

如く之涉度作候何分

御英断を以御之

御疑念 御採用之上

御因布被 作出度千求美拜奉渴皇作猶委細

儀ハ腐毫思辨し及ふ云々之涉度作得共餘情ハ

廟堂 御老練之 帝方々 御鑑察可被下儀奉

伊皇都文野言を不社言上仕作付

御寛恤之 御上才僭乱之罪

御赦免被為成下直

御沙汰為

仰付被下為謹而奉懇願作於然去弟一

天照皇大御神之

御名譽を顯揚仕

神州之實光を輝一次に重代奉戴未り高奉成

皇恩之萬分一を茂奉報下ハ國國億兆之人民と共に再生

神恩之浴

國家長安を祈り此後永遠靈々安んず得且又師

遺訓を達し世々天地と共に忘却不仕感激不可有甚涯

御座作以候直 御執奏奉冀上作仍不堪恐惶之至

頓首萬死萬死

肥前國彼杵郡長崎

之唐通事所筆者

貞方次平左衛門

明治六年

正月

阿部真造

信平

辨事御中

皇國の古事記の心を以て真の道と志ありて人々を導く

本居宣長及其門人平田篤胤の進言に巨壁の汚座は

篤胤の靈に志柱に

師の古事記傳の古事記の元を記し終ひ

天武天皇の元年申年なり其撰録

元明天皇の和洞元年も申年なりかくておぼけなく宣長

は傳を著し始むる今の大隅代は明和元年も申の

年と云ふ事なるん宿願よあみ思ふといふれはる事なり

おたふ事一成にのちあてふふにのちあてなく、為礼作し、説をふと
して西遊し、其柱し、書を著し、そのけ文化九年、も又申年
たの事し、をなんま、この編にのみ思ふと、相見、その又、其後
又思ひ合せひ。

神武天皇の 御紀に 元年辛酉春正月朔即位於橿原

宮とあれが、あせし、五葉を固め、つうん、為、基礎し、

弟催あり、ハ、金鏡其前年申の年、神事成、今、段

け、思、兼、捧、以、事、不、計、又、甲、年、一、付、宮、稿、に、相、候、ひ、居、を、ひ

